

## ナーガールジュナ（龍樹）の理解を基盤とした

## チベットと日本における仏教の展開

吉村 均

### 一 チベットの仏教理解とナーガールジュナの位置づけ

チベットの伝統では、仏教を三転法輪説で捉えていて（初転法輪Ⅱ四聖諦など止悪修善の教え、第二転法輪Ⅱ般若経の空の教え、第三転法輪Ⅱ空を理解した言葉を超えた境地とそこに至る実践的な教え（含、密教）、ナーガールジュナの伝記や著作も、それに対応するものとして理解されている。三転法輪説は『解深密経』で説かれているもので、そこでは初転法輪と第二転法輪を未了義、第三転法輪を了義としているが、中観を最高の見解とするチベットでは、第二転法輪を了義として捉えている。第三転法輪については解釈が分かれ、唯識を未了義とする点では一致するものの、仏性（如来蔵）ないし光明の心の教えについては、ニンマ派では了義とするが、ゲルク派では未了義

とするという、解釈の違いが見られる。<sup>(1)</sup>  
チベットでは、次のようなナーガールジュナの伝記を伝えている。<sup>(2)</sup>

七年以上は生きられないと予言され、子供の死ぬ様を見るこ  
とが耐えられない親によつて森に捨てられたナーガールジュナ  
は、無量寿仏の灌頂を受けて不死を成就し、出家してナーラン  
ダー僧院にはいった。そこで破戒僧を追放して戒律の乱れを正  
し、初転法輪の教えを盛んにした。その後、ナーガ（蛇神）か  
ら十万頭般若経を得て、それに基づく空性の教えを広め、第二  
転法輪の教えを盛んにした。晩年は南インドの吉祥山に住み、  
顕密の教えを説いて、第三転法輪の教えを盛んにした。ナーガ  
ールジュナと親交のあつた南インドの王は、ナーガールジュナ  
の寿命が続く限り生き続けるため、王位に就けないことを恐れ  
た王子がナーガールジュナに死を願ひ、浄化されていない過去

の因縁によって吉祥草で首を切ったが、首は「自分は極楽に赴くが、再び首と胴がつながってこの世に戻る」と告げたため、復活を恐れた王子は、首と胴体を遙か遠くに引き離れたという。

中国に伝わる鳩摩羅什訳の「龍樹菩薩伝」とは、龍宮で大乗經典を得たことと晩年南インドの王に仕えたとする点に類似が見られるものの、かなり異なっている。ただし王子が死を乞うた話はインドを訪れた玄奘「大唐西域記」にも記されており、チベットで作られた話ではなく、インドに由来するものである。

インド、チベット、中国、日本の仏教理解に共通して、大きな影響を与えたものとして、「楞伽經」などで説かれている、釈尊がナーガールジュナの出現を予言（授記）したという話がある。

チベットの僧院で中観の教科書として用いられているインドのチャンドラキールティが著した「入中論」は、ナーガールジュナの仏教理解に従う理由として、釈尊自身が正しく教える理解し空性を直接体験して聖者の境地に至ることを予言していることを挙げ、この「楞伽經」などの説を引用している。

聖者龍樹によって、聖教が不顛倒に知られて、中観の論書（中論）の中に、道理（理証）と聖教（教証）とをもつて、諸法の本性が如実に（見られ、それが）、無自性を特質とするものであることが明確に説かれている。それ故に、聖者龍樹により理証と教証とをもって諸法の真実が説かれ

ている如く、ただその如くにのみ、わたし（入中論）によって、かれ（龍樹）によって解明されている教えが、そのままに説かれるべきである。もし人あって、ともかく、かの聖者龍樹において、「了義の」聖教（の意味）が不顛倒に決定されることがどうしてあるのか、と云わば、經の中に知られる。すなわち、「聖入楞伽經」の中に、次の如く、「南方の國に、比丘にして吉祥を具し名声大なる人がいる。かれの名は、龍と呼ばれ、有と無との両（辺）を粉碎して、〔中道に立つ。かれは〕自らの乘を、世間における無上なる大乘と顯示し、歡喜地に到達して、安樂國にかれは趣く」と説かれている。また：（チャンドラキールティ「入中論」六章三偈自註）

中国でも「中論」などに基づき三論宗を打ち立てた吉蔵「三論玄義」がこの「楞伽經」の言葉を紹介し、後で見ると、空海や親鸞も自己の著作で引用している。

チベットでは、初転法輪に対応するナーガールジュナの著作（教誡聚）として、戒律関係の著作や、南インドの王に宛てた「勸誠王頌」「宝行王正論」「宝行王正論」は三転法輪すべてに関わるとする解釈もある）が挙げられている。第二転法輪に対応するとされているのは、「中論」などの理論聚で、第三転法輪の著作とされるのは、言葉を超えた仏陀の境地を讃えた讚嘆聚である（真作の可能性が高いものとして梵文の残る「四讚頌」があり、チベットで重視されたものとしては後で取り上げる「法

界説」がある)。

ナーガールジュナの著とされる讃嘆頌は漢訳・チベット語訳共に数多く存在し、学問的には真作であることを疑問視されているものが少なくない。またチベットでは密教行者のナーガールジュナを同一人物とするが、時代が異なる。ただし、六百年生きたというのも、梵文の残る「文殊師利根本タントラ」に説かれており、インドで生まれた説である。

本稿ではこのようなインドからチベットに伝えられた仏教理解を踏まえて、空海を中心に道元や親鸞の教えを、そのナーガールジュナ理解を中心に捉えなおすことを試みる。

## 二 空海のナーガールジュナ理解

通常の言葉を介した教え(密教の立場から見た顕教)が、相手に合わせて説かれた、仏陀の境地を目指す教え(因乗)であるのに対し、密教は、言葉を超えた仏陀の境地そのものを示した教え(果乗)とされる。言葉を介して伝えることができず、そのための儀式が灌頂で、そこで用いられる曼荼羅は、仏がいてその外に仏の世界が広がるのではない、主客二元論を超えた仏の世界を象徴的に表したもので、本来は仏の世界は二次元や三次元で示すことができるものではない。空海は中国に渡って胎藏・金剛界の灌頂を受け、体系的な密教を日本にもたらした。この二つの系統は、ナーガールジュナ(空海は龍猛という訳を用いている)が南インドの南天铁塔で金剛薩埵から授かったも

のとされている(「秘密曼荼羅教付法伝」)。

空海は、十住心の体系で、ナーガールジュナの「中論」などに基づく三論宗は第七住心に相当するものとして、最高の教えとはしていない。その一方で、平安時代の日本でもナーガールジュナの作とすることに否定的な見方であった「菩提心論」「釈摩訶衍論」をきわめて高く評価し、仏教の全般、十住心すべてにわたるものとして引用している。

空海は、漢訳のみ存しナーガールジュナの著作として中国・日本で重視された「大智度論」で、戲論寂滅を「助仏道の初門」(第五)、不生・不滅・不住・不異を「仏法の初門」(第三十二)と説いていることを指摘し、分別明菩薩(パーヴァヴィヴェーカ)の「中論」註「般若灯論」で戲論寂滅の境地に導くことを「これ一部の論宗なり」と結論していることから、「中論」は言葉を超えた境地への導きの書であって、究極の境地を説き明かしたものではないとしている。

諭していわく、いまこの文によらば、明かに知んぬ、「中観」等ほもろもろの戲論を息めて寂滅絶離なるをもつて宗極となす。かくのごときの義意はみなこれ遮情の門なり。これ表徳のいいにはあらず。論主自ら入道の初門と断じたまえり。意あらむ智者心を留めてこれを九思せよ。(空海「弁頭密二教論」著作全集一)

空海が十住心の体系でその上に位置づけた「法華経」(第八住心)や「華嚴経」(第九住心)は、空性を直接体験した者に

とつての、主客二元論を超えた境地を描き出した、第三転法輪系の教えである。

その境地を言葉を紹介せず直接伝えるのが密教で、空海は、「弁顕密二教論」および「秘密曼荼羅教付法伝」で、段階的に相手を導くのが応化仏の教え、自内証の境地を説くのが法仏の説であるという「楞伽經」の説を引用し、「秘密曼荼羅教付法伝」では、応化仏の説とは顕教のことで、法仏の説法とは密教のことであると結論づけている。

この説は先に挙げた「楞伽經」のナーガールジュナ出現の授記の解釈に関連して引用され、菩提流支訳「入楞伽經」でその説は釈尊が「わが乗たる内証智は、妄覚は境界にあらず。如来滅世の後、誰か持してわがために説かん」という言葉に続けて説かれていることから、内証智を説く無上乘とは密教のことであり、これは密教の相承者としてのナーガールジュナの出現を予言したものと解釈している。

如来のこの記は、顕教のために記するにあらず、何をもつての故に。顕教の記は、「摩訶摩耶經」に説くところこれなり。何とならば、迦葉・阿難より次第に説けばなり。

この記は直ちに竜樹を指す。また如来明かに、わが乗たる内証智と説き、またわが乗たる無上法というなり。無上最上仏乗の名は、「金剛頂經」に如来明らかに説いてこの秘密仏乘に名づく。(「秘密曼荼羅教付法伝」著作全集2)

このようなナーガールジュナ理解からすれば、二元論を超え

た境地にあるナーガールジュナがその仏教理解の全体像を記した著作があるはずだという推測が出てくるのは当然で、それに相当する著作として見出されたのが「釈摩訶衍論」や「菩提心論」だったと考えられる。

### 三 チベットにおける伝ナーガールジュナ 「法界讚」重視

興味深いことに、インドから別々に教えが伝わったチベットのナーガールジュナ理解においても同じような展開が見られる。チャンドラキールティの「中論」解釈は、「宝行王正論」など当時のインドにナーガールジュナの著作として伝えられていた他の著作からその仏教理解の全体像を捉え、そこに言葉を超えた境地への導きの書として「中論」の内容を位置づける点に特色がある。「中論」註「明句論」の後書きで、理解の手がかりとした著作のひとつとして讚嘆頌も挙げ、「出世間讚」(四讚頌のひとつ)を教証として用いている。

インドからチベットに招かれたアティシヤは、仏教の様々な教えを段階的に理解・実践する「菩提道灯論」を著し、それが現在の四大宗派すべての仏教理解の基盤となっている。アティシヤは、「見法界歌」で、「法界讚」をナーガールジュナの著としてかなり長く引用している。アティシヤの教えを受け継ぐカダム諸派を統合し、新たにゲルク派を打ち立てたツォンカバも、「法界讚」を教証として著作の中で用いている。「法界讚」は三

転法輪すべてにわたるナーガールジュナの著作だというのが、チベットの理解である。<sup>(8)</sup>

この「法界讚」には、チベット語訳のほか、漢訳（施護訳）も存在するが、全体の内容や取り上げられているテーマ、用いられている喩えなどは共通するので、別の著作とはいえないものの、細部にはかなりの相違がある。漢訳「法界讚」では浄土信仰を否定するほか、唯識の用語が用いられている、ナーガールジュナの著作では二身（法身・色身）を説くのに三身（法身・報身・化身）を説くなど、ナーガールジュナの著作と考えるには疑問の出る内容が見られるが、チベット語訳にはそれらはまったくない。

月輪賢隆「仏典の批判的研究」（百華苑）に研究があり、不空三蔵の訳した「百千頌大集経地藏菩薩請問法身讚」が、ナーガールジュナの著ではなく経典とされているが、同一書で、「或は八臂者、三目熾盛身有り……」などと密教的な内容を説く箇所（漢訳「法界讚」にも見られない）以外は、施護訳よりもチベット訳「法界讚」によく対応していることを指摘している。

#### 四 空海の「菩提心論」重視

「百千頌大集経地藏菩薩請問法身讚」の訳者である不空三蔵がナーガールジュナの著作として訳した「菩提心論」については、生井智紹の研究が存在し（「密教・自心の探求」大法輪閣）、同種の階梯的な菩提心修習書がインドで作られチベットに伝え

られていることを指摘している。そのひとつが密教行者のナーガールジュナの著とされる「菩提心積」<sup>(9)</sup>で、この書は現在でもチベットでナーガールジュナの著として重視されている。

「菩提心論」のほかに見られない特色としては、通常の菩提心修習書で説かれる凡夫・外道・二乘（声聞・独覺）・大乘の階梯の上に、空性を直接体験した聖者の境地の慈悲を説く書として、「華嚴経」「観無量寿経」「涅槃経」といった第三転法輪系の経典、さらに密教を説く「大日経」「金剛頂経」が説く三摩地の菩提心を位置づけていることがある。

このように、中国・日本とチベットには、インドから別々に教えが伝えられたが、そのナーガールジュナ理解は、どちらでも、言葉を超えた境地へ読者を導く「中論」を著したナーガールジュナ自身は、言葉を超えた境地を体験している聖者であり、その境地を含む仏教の全体像を描いた著作が存在するはずだという観点から、それに当てはまる内容のものが捜し求められ、重視されていくという、同様の展開を辿っている。

日本仏教とチベット仏教それぞれの特色としては、チベットでは「菩提道灯論」に基づき、段階的に仏教を理解・実践して言葉を超えた境地に至るとされ、本来は頓悟系の実践法であるゾクチュエン（大究竟）やマハームドラー（大印契）も、菩提道次第（ラムリム）と結びつけて学ばれている。それに対して日本では、そのもつとも高度な境地の頓悟性が強調されることが多い。空海の教えとはかなり異なる仏教理解を示したと考えら

れることが多い道元や親鸞の教えも、この点では空海と同じ立場に立っている(大会発表においては空海・道元・親鸞それぞれの教えを検討したが、本稿では紙幅の関係もあり、道元と親鸞については要点を記すに留める)。

## 五 道元

禪という言葉はインドのディーヤーナの音写「禪那」を縮めたもので、一般的には無念無想の境地を目指すものというイメージがある。しかし道元は「弁道話」で、坐禅は六波羅蜜の禅定波羅蜜や戒定慧の定とは異なるものであると述べている。道元によれば、坐禅は仏陀の菩提樹下の覚りの瞑想であつて、自分の身口意を仏陀のそれと等しくして坐ると、世界がすべて覚りとなるという。

もし人、一時なりといふとも、三業に仏印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとくさとりとなる。……これらの等正覚、さらにかへりてしたしくあひ冥資するみちかよふがゆゑに、この坐禅人、確爾として身心脱落し、従来雑穢の知見思量を截断して、天眞の仏法に証会し、あまねく微塵際そこばくの諸仏如来の道場ごとに仏事を助発し、ひろく仏向上の機にかうぶらしめて、よく仏向上の法を激揚す。……しかあれども、このもろゝの当人の知覚に昏ぜざらしむることは、静中の無造作にして直証なるをもてなり。もし、凡流のおもひのこ

とく、修証を兩段にあらせば、おのゝあひ覚知すべきなり。(道元「弁道話」正法眼蔵I)

これはブツダガヤにおける覚りの境地を描いた「華嚴経」を思わせる描写だが、この「身心脱落」体験も、一般的な止(一点集中の瞑想)の三昧も、意識の働きを超えた境地であるために、体験者が取り違えてしまう危険性がある。このことは現在のチベットの指導においても、注意されるところである。道元は晩年に「正法眼蔵」を全百卷に増補することを試み、果たさず亡くなったが、晩年に新たに書かれた十二卷本のひとつ「正法眼蔵」(「四禅比丘」巻は、そのことを主題としている)。

四禅比丘は釈尊の直弟子だったが、色界定の四禅(非想非非想定。いわゆる無念無想の境地)を達成して阿羅漢になったと思ひ込み、釈尊の許を離れて瞑想に打ち込んだが、死んだ際に次に生まれる色界のビジョンが現れたため、釈迦に騙されたことと怒りの心をおこし、そのビジョンも消えて地獄に生まれてしまったという。優婆塞多の弟子の比丘も同様に四禅を達成して、阿羅漢になったと思ひ込んだが、師が神通力で盜賊や美女を見せ、恐怖や欲望の心を起こして、自分は阿羅漢ではなかったと気づいていく。

道元は二人の差を生んだものとして、正しい師に従うことの重要性を説いている。また阿羅漢や仏陀とはどのような存在かを知っていなければたやすく間違いが生じるとして、当時の中国の仏教・儒教・道教一致説を厳しく批判し、仏陀の智は孔子

や老子のそれとは比べものにならないとして、釈尊が論争を挑もうとした外道の論力を帰依させた話を紹介して、「大智度論」に引用された「義品」(文献学で經典の最古層とされる「スッタ・ニパータ」第四経に相当)の偈を孫引きしている。

各々究竟なりと謂ひて、而も各自ら愛着し、各自らはとして彼を非なりとす、是れ皆な究竟に非ず。是の人論衆に入りて、義理を辯明する時、各々相是非し、勝負して憂苦を懷く。勝者は憍坑に墮し、負者は憂獄に墮す、是の故に有智の者は、此二法に墮せず。論力、汝当に知るべし、我が諸の弟子の法は、虚も無く亦た実も無し、汝、何れの所をか求めんと欲ふ。汝、我が論を壊せんと欲はば、終に已に此の処無し、一切智も明らめ難し、適自ら毀壞するに足らんのみ。(「四禪比丘」正法眼蔵4所引「義品」)

これはナーガールジュナが釈尊の教えの核心とした、有と無の立場を離れた主張を持たない境地(「中論」「六十頌如理論」)と同じである。

道元は「正法眼蔵」「仏性」巻でナーガールジュナがアールアデーヴァに仏性を示した話を取り上げ、インド・中国・日本の祖師でナーガールジュナとアールアデーヴァほど卓越した師はいないと説いている。

……龍樹・提婆師資よりのち、三国の諸方にある前代後代、まゝに仏学する人物、いまだ龍樹・提婆のごとく道取せず。(「仏性」正法眼蔵1)

道元は修証一等を説くが、これはナーガールジュナが体得し人々を導いた、有と無を離れた境地のことである。

修証は無にあらざり、修証は有にあらざり、不知なり、不得なり。(「仏向上事」正法眼蔵2)

それ、修証はひとつにあらざりとおもへる、すなわち外道の見なり。仏法には、修証これ一等なり。(「舟道話」正法眼蔵1)

道元にとって坐禅とは、有無を超えた、第三転法輪系の実践なのである。道元が死を前に「四禪比丘」巻を著したのは、その自分の理解が没後に正しく伝わらないことを恐れてのことだろう。

## 六 親鸞

親鸞の教えは、「南無阿弥陀仏」と唱えさえすれば誰でも往生できると誤解されることが多いが、実際には、阿弥陀仏の救いを確信した時に、心の底から喜びが湧き起り、阿弥陀仏を称えようとした時に往生が定まるといふものである。「南無阿弥陀仏」はその表現(報謝の念仏)である。

弥陀の誓願不思議にたすけまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。(唯円「歎異抄」)

親鸞は尽十方無礙光如来という阿弥陀仏の名などから、阿弥

陀仏とその世界は実際には無限の光であり（可視光線ではない）、それに照らされていることに気づいた時に、心に姿容が生じると説いている（『教行信証』）。

一般的な浄土理解は、西方遙か彼方に素晴らしい世界があるとするものだが、親鸞はそれは阿弥陀仏の誓願を理解しえない者のための、方便による化身土であり、そこに生まれることを願う者は仏の誓願を疑った罪によりそこに閉じ込められると説く。

仏教では、認識される世界は客観的な実在ではなく、捉える主体の意識のあり方によって世界は変わるとされる。浄土とは言葉を超えた境地に到達した仏に捉えられる、主客二元論を超えた世界のことである。浄土経典も第三転法輪系の経典であり、『華嚴経』『入法界品』の普賢行願讃では、仏の毛穴ひとつひとつに仏の世界が広がるといふ、主客二元論を超えた境地として、仏の世界が讃えられ、その境地を實際に体験する方法として、阿弥陀仏の極楽への往生が願われている。

仏の世界は定義上、二元論的な認識に捉われている凡夫には捉えることができず、そのような者に対しては、眼には見えないうが西方遙か彼方に仏の世界があり、二元論を離れた仏には我々は見えているのだと説かれる。その眼を意識し、仏の光に照らされていることを実感することによって、仏の世界やその姿は目に見えなくても、その存在は疑いがないことが確信されるというが、これは一般的な仏教の階梯論でいえば、空性を確信

する加行道の段階に相当する。親鸞がそれを歓喜地と説くのは、確信を得た者は意識が解体する死の際に二元論を超えた仏とそ  
の世界を体験できるためで、将来得られる境地を先取りして名  
づけたものだろう（仏陀を目指す心を菩提心と覚りの心と呼ぶ  
のも同様の考え方による）。

このように、親鸞の教えも第三転法輪の境地を体験する実践  
で、親鸞は自分の仏教理解の先例として、インド・中国・日本  
の七祖を挙げるが、その筆頭とされているのが、ナーガールジ  
ユナである。親鸞は、ナーガールジュナが『楞伽経』で釈尊に  
出現を予言された存在であること、漢訳のみ伝わる『十住毘婆  
沙論』で、有無を超えた境地に至る実践として、自力による道  
と他力による道の二通りがあると説いていることを取り上げて  
いる。

釈迦如来、楞伽山にして、衆のために告命したまはく、  
南天竺に龍樹大士世に出でて、ことごとくよく有無の見を  
摧破せん。大乘無上の法を宣説し、歡喜地を証して安樂に  
生ぜんと。難行の陸路、苦しきことを顕示して、易行の水  
道、樂しきことを信樂せしむ。弥陀仏の本願を憶念すれば、  
自然に即のとき必定に入る。ただよくつねに如来の号を称  
して、大悲弘誓の恩を報ずべしといへり。（親鸞『教行信証』  
正信偈）

親鸞の教えは明治以降、仏教の文脈から離れ、キリスト教的  
な救済信仰として理解される傾向があったが、自力と他力は空

性を直接体験する方法の違いであり、親鸞自身が仏心(禪)・真言・法華・華嚴・三論のような自力の頓悟の教えに対応する、他力の頓悟の教えであると位置づけている(『末灯鈔』所収「有念無念の事」書簡、「愚禿鈔」)ように、悟りの宗教なのである。

空海の著作の引用は勝又俊教編「弘法大師著作全集」山喜房仏書林、道元は水野弥穂子校註「正法眼蔵」岩波文庫、親鸞は「浄土真宗聖典(註釈版第二版)」本願寺出版による。

(1) 仏性は如来蔵とも呼ばれるように、仏陀から見ると衆生に仏としての性質が備わっているというもので、「涅槃経」では十地の菩薩でも完全に理解することができないとされている。ニンマ派のロンチエムパは、その意味で仏陀以外には未了義の教えであるとし(「心性休息論」)、顕教を知的に理解した上で本格的な密教の実践をおこなうゲルク派では、顕教の段階では仏性を未了義の教えとするものの、密教の実践では、ツォンカバ「真言道次第」が説くように、空性を捉える二元的意識を超えた心として、光明の心を重視している。空を体験的に理解した上で境地とする点では、ゲルク派もニンマ派も、表面的な解釈の対立ほどの違いはない。

(2) 中村元「龍樹(講談社学術文庫)にターラナータ仏教史とプトン仏教史のナーガールジュナ伝の和訳が収録されているほか、現代のチベットで一般的な理解が、伝統的説に基づく仏教史を記す亡命政府の学校教科書に掲載されている(石濱裕美子・福田洋一訳「チベットの歴史と宗教」明石書店)。

(3) 松長有慶「密教の相承者」評論社。

(4) 小川一乗「空性思想の研究」文栄堂。

(5) 松長 前掲書。

(6) 拙稿「中観派とその論法」「カルチュール」六巻一号、「謎解き」中論」「チベット文化研究会報」二〇一二年三、四号。

(7) 望月海慧「ディパーバンカラシュリジュニャーナの法界見歌につ

つ」[The Proceedings of Korean Conference of Buddhist Studies] 3-1。

(8) ツルティム・ケサン、藤仲孝司「ツォカバ中観哲学の研究」V、文栄堂の序論を参照。

(9) プトン仏教史に他の密教文献と共にナーガールジュナの著作として名前が挙げられている。

(10) ロンチエムパ「心性休息論」、パトゥル・リンポチェ「クンサン・ラマの教え」、ガンボバ「解脱荘嚴」、ジクテン・スムグン「大印契五支証道歌」などを参照。

(11) 説明が十分でない点は、関連する拙稿「神と仏の倫理想」二章二、三、北樹出版、「道元・親鸞が見たもの」「大法輪」二〇一〇年一〇、十一月号、「チベットの浄土教」「日本の浄土教」峰島旭雄監修「浄土教の事典」東京堂出版を合わせて参照されたい。

(12) 拙稿「仏教における神秘主義」「人間の文化と神秘主義」北樹出版を参照。

(13) 拙稿「ナーガールジュナ(龍樹)の実践的仏教理解・試論」「カルチュール」四巻一号。

(14) 拙稿「道元・親鸞が見たもの」前掲を参照。

(15) チベットでも極楽に生まれてそこで修行してさらに次の生に仏陀になるとする考えが一般だが、密教の阿弥陀仏と極楽の瞑想法もあり、ゾクチェンの聴聞解脱(チベットの死者の書)では、意識が解体される死の瞬間を利用した解脱法が説かれる。これらはどれが正しくどれが間違っているというのではなく、修行者の機根により仏の世界は異なる現れ方をするとされ、ミンギル・ドルジェ「阿弥陀仏の十段階の成就法」のように、それらを段階的に瞑想していく修行法も存在する。

(よしむら・ひとし、日本倫理想史・仏教学、公益財団中村元東方研究所研究員)